

大隅清治さん

(日本鯨類研究所顧問)

捕鯨の消滅は、世界的な損失

鯨肉が食卓にのぼらなくなつて、ずいぶん経つ。「食べたことない」という若い人も多い。だが、人類の食糧問題を考えたとき、捕鯨継続は重大な意味を持つ。鯨研究の第一人者、大隅清治さんに聞いた。

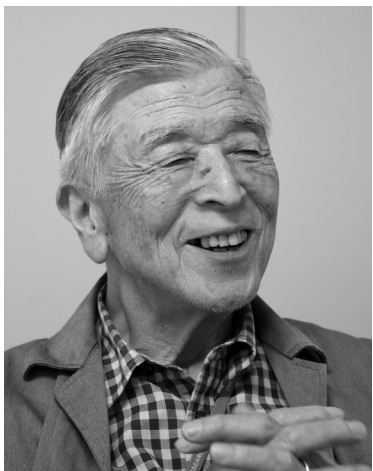
鯨を食べ続けてほしい

——日本では四〇〇年以上前から組織的に鯨を捕り、食べるだけではなく、照明や工芸品などさまざまなものに利用してきました。しかしいま海外の反対や過激な反捕鯨団体の抗議で、捕鯨とともに鯨食文化の継承も危ぶまれています。

私は、鯨食文化の危機もさることながら、世界的な食糧問題の切り札として鯨を捉えています。

世界的な食糧危機は以前から叫ばれていますが、地
する切り札になる可能性があるはずだと言いつつ続けてい
ます。
——限りある鉱物資源とは違い、持続的に活用できる
生物資源である鯨にもっと注目すべきだ、と。
そうです。私はいまの野生の鯨は放牧状態にあると
捉えているんです。放牧は、牛や馬を草原に放して管
理し、必要に応じて間引きします。草原を太平洋に、牛
馬を鯨に置き換えたらどうでしょう。

根こそぎ間引いたら牧場主である人間が生活できな
いから、これまでの研究や調査で分かった科学的な根
拠を基に持続的な数を守りながら利用する——。これ
までの調査研究の蓄積をもつてすれば、不可能な話で



●おおすみ・せいじ 1930年、群馬県生まれ。農学博士。東京大学大学院生物系研究科博士課程修了。『クジラのはなし』『クジラと日本人』など著書多数。2006年から和歌山県太地町立くじらの博物館名誉館長を務める。

上の生産力にはこれ以上大きな期待はできません。

一方、地球の四分の三は海です。畜産業は広大な牧場や餌を生産する農地を必要としますが、鯨は広い海で自然の餌を利用して棲息しています。たとえば地球上で最大の動物であるシロナガスクジラは体重一〇〇トンを超えます。牛一七〇頭に相当する大きさです。

鯨に限らず生物は繁殖します。また適切に間引くことで生産力が増します。それに鯨は哺乳類なので、魚のように環境の変化に影響されにくいという特徴があります。つまり自然の力で再生し、しかも安定した生物資源である鯨の特性を活用すれば、食糧問題を解決

はありません。

最近では、鯨をほとんど捕獲せずに放っておいたことで悪影響も出ています。日本国内でも鯨やイルカの座礁のニュースが増えています。これは鯨の数が増えていることが一因と考えられます。本来なら利用できる資源をムダにしている。本当にもつたいないですよ。

——自然のシステムを合理的に利用するという観点から見れば、現代的な産業といえますね。

捕鯨は非常に将来性のある産業だと思います。とくに島国である日本は、海の生物資源をいかに合理的に利用していくかがとても重要になってきます。その一環として、捕鯨も考えていくべきです。しかし国際的な反捕鯨の煽りを受けて、日本の鯨食文化が根絶やしになってしまつと、生物資源としての鯨の利用も期待できなくなつてしまいます。ですから鯨の食文化を守り、継承することが大きな意味を持っています。何よりも大切なことは鯨を食べること。話しているだけでは何も始まりませんから。

——国内でも鯨に対して関心が薄れています。鯨肉を食べた経験がないという若い世代も多い。

それは日本が飽食で食料が余っていることと、捕鯨